

日本橋に再び日を当てる

芝浦工業大学工学部 土木工学科
地域デザイン演習2 5班

- 1603年 ● 木造の日本橋完成
- 1604年 ● 五街道の起点になる
- 1911年 ● 石造の日本橋誕生
- 1963年 ● 首都高環状線開通
- 現在～ ● 日本橋川沿いの再開発

近代化で隠れた魅力

再開発計画

進められる「日本橋地区再開発計画」

日本橋川地区では現在、「歴史」「品格」の継承、新たな「賑わい」「創造」を生み出す拠点の形成を掲げ、三井不動産と野村不動産が主体となって5つの地区で再開発計画が進められている。それぞれの地区に高層ビルの建設が計画されており、ビジネス・住宅・文化交流・商業が複合した施設が予定されている。

八重洲1丁目地区



川沿いにはプロムナードやオープンスペースが整備され、地区によって多様な魅力的な水辺空間や交流空間の創出が計画されている。また、地上・地下・デッキレベルでエリア内の歩行者ネットワーク形成が計画されている。

強化される防災対応能力

- ・ 帰宅困難者支援機能の整備
各地区において一時滞在施設・待機場所を確保し、また、防災備蓄倉庫(3日分)が整備されている。
- ・ 分散型エネルギーシステム導入
非常用発電機能の設置や一部地区ではCGSの導入と非常用発電施設による電力確保を検討



室町小路：江戸時代からの老舗が多く集まるむろまち小路。景観整備が行われており、歴史あるなまみが楽しめる。



日本橋川：首都高速道路が日本橋川上空を走る日本橋川、近年では景観等の観点から見直され、現在地下化工事が進められている。またそれに伴い周辺の再開発も行われている。



首都高速道路：五街道の起点とされ江戸時代から繁栄してきた日本橋は、重要文化財に指定された建物が残る一方、高層ビルや商業施設が立ち並び「歴史」と「現在」が交差している。

日本橋特徴

昼夜間人口



企業の集積

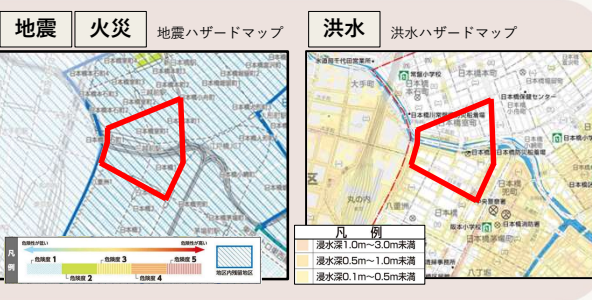


歴史的な背景より金融機関や製薬会社が多い。また現在、日本橋全体として約120社の大企業の本社がある。再開発を通して、MICE機能の整備による国際競争力の強化や国際イベントの開催により更なるビジネス拠点としての成長が見込まれている。

災害に対する強さ

災害に強い日本橋

火災危険度と建物倒壊危険度からは、評価した総合危険度で地区の危険度はランク1になっている。また、日本橋地区全域で地区内残留地区（建物の不燃化により、大規模な延焼火災の恐れがなく、広域的な避難を要しない区域）に指定されている。また、洪水ハザードマップより、日本橋川の最浸水深が3.0m未満であり、周辺の河川の氾濫時においても浸水規模が小さい。さらに、地下鉄の入り口には防潮板が設置されているほか、高層ビルを緊急避難所として利用することもできる。



日本橋地区の課題

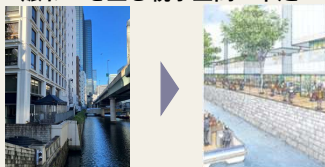
地域社会

交流の場となる公共空間の不足



現在はビルが立ち並び、地上レベルの公共空間がほとんどない。再開発計画により広場の整備が予定されているが、建物や道路によってそれぞれが独立してしまっている。

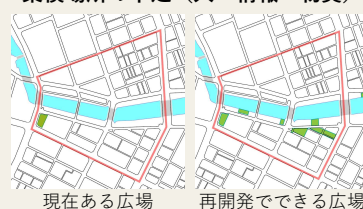
賑わいを生む親水空間の不足



現在の日本橋川沿いは岸の際まで建物が立ち並んでいる。再開発計画によって建物と川岸間に余裕が生まれるが、建物によって広場に連続性が薄く、賑わいの創出に欠けてしまっている。

防災

集積場所の不足（人・情報・物資）



現在の日本橋地区には広場がほとんどない。再開発計画により新しい広場が将来的にはできるが、小規模かつ分散している。しかし、災害時に避難案内や情報共有、物資の受け渡しなどを行うには、まとまった広場空間が必要であるため、機能が不足すると考えられる。また、土地勘のない買物客や外国人観光客にとって、緊急時の避難移動は困難なものであり、日本橋のようなランドマーク周辺で、避難案内や多言語の情報発信が行える場が整備されているほうが望ましいといえる。

計画の方針

景観

- ・ 穏やかな日本橋川
- ・ 五街道の起点「日本橋」
- ・ 時代の変遷を湛える街並み

文化・歴史

- ・ 町人文化を保存する室町
- ・ 伝統を継承する老舗
- ・ 歴史と現代の融合

防災

- ・ 避難案内所の設置
- ・ 情報共有の場の設定
- ・ 物資の配給場所の用意

地域のポテンシャルを引き出す＋防災力強化 計画の概要

① 川沿い広場の創出

人々が気軽に交流できる空間づくり



② 舟運の強化

身近な観光の交通手段としての舟運利用



「川沿いにより自由度が高く、連続性のある広場が欲しい」

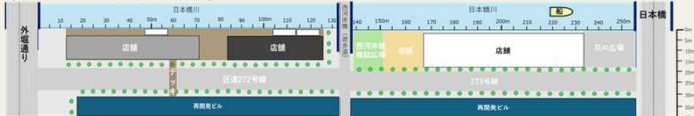
広場の用地を確保するため、区道272・273号線、148号線を廃線。また、八重洲通仲りの一部区間を歩行者空間化する。272・273号線より川治いにはオープンスペースやブルムナード、商業施設の建設が計画されているが、今回の提案ではそれらの建物と区道をまとめて提案を行う。さらに、ここでは272号線沿いを取り上げて提案の詳細を説明する。273・148号線沿いにおいても同様の提案を検討している。

人々の憩いの場の形成

再開発によって高層ビル内にオフィスビルや商業施設だけでなく、国際水準ホテルや居住施設の整備が計画されている。それによって、日本橋地区を訪れる人々の年齢層や目的の幅が現在よりも広くなると考えられる。様々な機能を持つことが出来る連続的なある場所は多様なニーズに対応し、自然と人々が集う交流空間となりうる。また、日本橋川に開けた空間や景観から、ゆっくりと休める望みの場を提供する。



(平面図：現状の再開発計画)



(平面図：提案)



フリースペース

平常時：歌舞伎や日本橋の老舗イベントの開催や出店を並べ、賑わいや交流の創出を図る。
災害時：建物外にいる人の一時集合場所として活用する。

運動スペース

平常時：健康遊具やミニゴルフ場を整備し、オフィスワーカーの運動不足解消やリフレッシュスポットとして活用を計画。
災害時：避難におけるストレスの解消や運動不足を防ぐために開放する。

カフェスペース

平常時：雨風を避けながら、持ち込み・キッチンカーで購入してそのまま飲食できるスペースを提供する。

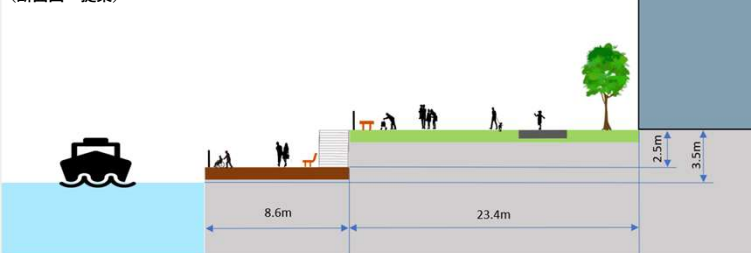
災害時：外部から訪れた人向けに避難にかかる情報を提供する避難案内場所を開設。

ウッドデッキ

平常時：日本橋を一望できるスポットや、電光掲示板から観光等の情報が得られる場所として活用する。

災害時：船からの物資引き上げや、電光掲示板で多言語に対応した災害情報の発信を計画。

(断面図：提案)



川辺の景観を魅力的に

左図の断面図の通り、川岸には川面から高さ1mのオープンスペースを設ける。これによってより高い親水性の確保だけでなく、広場から日本橋方向の景観に解放感を持たせることが出来る。また日本橋においてライフサイエンスや文化発信の拠点となる高層ビル、賑わい・交流を生み出す街並みを船から一望出来る。上段は川面から高さ3.5mの広場とし、大雨時の最慢水深予測の3.0m以上にすることで、浸水被害を歩行スペースのみに抑制することを狙う。

災害後の防災機能強化

日本橋地区周辺を訪れた国内・国外からの観光客・買物客といった土着のない人々が一時的に避難するだけでなく、災害発生後の行動、待機・滞在場所の情報を得るための「避難案内所」としての役割を果たすことが出来る。また、またまったに損傷確保できるため、舟運と連携した物資・瓦礫の集積地や長期避難所になった場合の仮設住宅用地としての利用が考えられる。さらに、地区一体の情報共有の場や滞在する人々のストレス対策としても活用できる可能性を持っている。

提案②：舟運の強化

「より多くの人に舟運を知ってもらいたい」
「身近な交通手段として舟運を利用してほしい」

江戸以来、水の都として発展した日本橋。
舟運を本格化させることで、近代化とともに薄れてしまっ
た人と川辺とのつながりを取り戻し、川沿い広域で地域活
性化を目指す。

具体的な舟運のコースとして、日本橋を起点とした日本橋川・神田川・隅田川の3つの川を周回する環状コースを提案する。観光地への移動手段としての利用はもちろん、将来的には、身近な交通手段としての利用の定着を狙う。



集客力の向上

現在運航している日本橋川でのクルーズとは異なり、常に日本橋川を舟が運航することを想定している。舟運の様子を多くの人が見るようになるため、日本橋にさらに人を呼び込むことが出来る。

また、コース上にある船着場から乗降が可能であり、鉄道の駅からのアクセス性をより良くするため、3カ所に新しい船着場を設ける。アクセス性を向上させることで、舟運の利便性を高めることが出来る。

日本橋川特有の景観

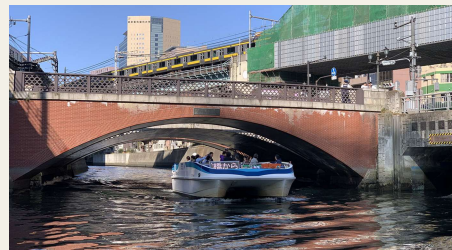
日本橋川・神田川・隅田川の3つの川を通るため、それぞれの川が見せる様々な風景を楽しむことができる。特に日本橋川からは、歴史的建造物と近代的建造物の入り混じるまちなみを、川沿い広場が創出されることに伴い、一望することができる。



+災害時の物資の運搬

災害時には、品川方面やお台場方面など、さらに広域に舟を渡すことで陸上交通が麻痺した場合の交通代替手段としての利用も期待できる。

また、川沿い広場と連携し、広場に集められた物資やがれきなどの運搬としての利用も期待できる。



船の規模感としては、定員が10人前後のものを想定している。日本橋川や神田川の川幅が狭さ、そして、川に架けられる橋の低さを考慮しているためである。